Title	社会課題に対する大学生との協働のまちづくり:八尾市の事例から見えてくる、新たな大学生との関わり方
Author	中村, 満
Citation	関西都市学研究. 2 巻
Issue Date	2018-03-20
ISSN	2432-7239
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	包摂型社会研究会
Description	特集(I)包摂型都市間ネットワークの試み

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

社会課題に対する大学生との協働のまちづくり
――八尾市の事例から見えてくる、新たな大学生との関わり方――

中村　満（八尾市人権文化ふれあい部桂人権コミュニティセンター）

はじめに

近年、大学生が地域のまちづくりに参加する事例は急激に増えてきた。少子高齢化によるまちづくりの担い手不足、活性化に向けての新しいアイデアを取り入れるため、そういった地域・行政からのニーズと大学の実地研究を地域フィールドで行えるメリットがマッチングした結果である。しかしながら当事者の大学生のニーズに応えている事例は一体どれだけあるのだろうか。

本来のまちづくりにおいて、人と人のつながりは欠かせない。どれだけハード面を整備しても、ソフト事業を通し、地域内で想い出づくりをしても、結局人と人がつながれる過程を踏んだまちづくりを行わないと、事業が終われば崩壊してしまう危険性がある。

大学生も人である。決して一時の活性化要素や、若者提案によるまちづくりという形だけの駒として扱うべきではない。一個人として尊重し、まちづくりの担い手として扱うべきである。

包摂型社会の中に大学生の存在も含まれるならば、大学生の存在に焦点を当てることも重要な視点と言える。

本論では、大学生が関わる社会課題に向けた協働事例をもとに、まちづくりでの大学生の関わり方について言及したい。

Ⅰ　大学生の存在

1　大学生が関わる意義

（1）　人としての大学生

そもそも大学生は何故まちづくりに興味を持つのだろうか。その理由は実に様々である。就職活動で優位になるため、ゼミ活動の一環、将来まちづくり活動を仕事にしたいため、地元を盛り上げたいため、人と触れ合うのが好きなため、社会問題に興味があるため、もしくはその複数の理由をもって地域のまちづくりに挑んでいる。また個々でその想いの大きさは変わってくるため、一様に大学生という括りで相手を見ることは間違いである。一個人として相手にすることで、まちづくりにおいても、大学生自身の個性を活かすができる。

逆説的にいうと、多くの学びの場から、まちづくりをすることを選択している大学生なのだから、何かしらの理由が必ずあって、まちづくりに参加するはずなのである。従って、彼らの参加理由を知ることに、まちづくりを面白くするヒントが隠されている。

（2）　大学生の存在の変化

10 年ほど前はそれほどまちづくりの分野をインターネットで探すということはしなかった。教授が仕事で持っているフィールドや、インターシップのような、ある程度周囲が守ってくれる状況の中で、一定期間だけ参加していた。

そうした状況の中での地域に出向いてのまちづくり活動では、地域の人からすると、まさに彼らはお客さまであった。こうした大学生は、一時的な空想のような発想、ワークショップやまつりでのマンパワーを求める地域には大いに貢献していた。もちろんこうした取組みの中で、地域に愛着が生まれ、自発的にその地域のまちづくりに入っていく大学生も存在した。しかしながらそうした大学生は、良くも悪くも異質な存在として社会から見られていた時期であった。

現在の大学生は少し違う。インターネットでまちづくりを行うフィールドを探すことが可能である。大学ＯＢやＳＮＳなどで繋がっている人たちがまちづくり活動に参加していたり、インターネットで募集が出されている、個人ボランティアとしての参加に応募するパターンや、さらには自分たちで組織を立ち上げ、集団でまちづくりに参加することを表明する団体も現れてきた。

こうした流れの中で、まちづくりに関わる大学生は基本的にまちづくりの過程そのものに興味を持つ人が多く、自発的に自ら考えた案の取組みを行いたいという願望を持っていることが多い。

（3）大学生の関わり方

こうした変化が生まれてくると、大学生の存在意義が地域においても変わってくる。まちづ

くりの主体となるのは地域住民であることは間違いない。そして、大学生の存在がよそ者のカテゴリーに入ることも間違いない。しかしながら、地域のまちづくりに自発的に取り組むということは、地域は大学生をお客様ではない、真剣な仲間として迎え入れなければならない。そうした新たな局面を迎えていることも間違いない。

これは大学生の関わり方の変化だけではなく、地域の弱体化が起こす人材不足の必然的な変化とも言える。

まちにどれだけ人口がいようとも、まちづくりに関わる人口が少なければ、何の発展もない。どれだけ多くの担い手を作っていけるかがこれからのまちづくりの大切な点であり、その一つの手法が大学生のまちづくり参加なのである。だからといって、地域側は大学生に全てを任せるような発想は好ましくない。あくまで既住民とは違う別グループとして扱うべきであるし、地域もまちづくりの担い手づくりを真剣に考えるべきである。

現在の大学生のまちづくりに関わる日数は驚くほどに短い。なぜならば、前述したように多くの選択肢の中から、まちづくりを選んでいるからだ。その過程で選択肢を一つに絞る必要は全くなく、むしろ多くの選択肢を残すことが最善と考えている大学生は多い。つまり、選択はしたものの、生活における優先順位が低ければ関わる機会も減るし、自分で選択しているからこそ、面白くなければいつでも切って捨てることができる環境にある。そういったことを踏まえると、如何に地域と大学生が濃密な時間を過ごすことが大事なのかは予測しやすい発見であろう。

こうした大学生の関わり方を理解した上で、大学生と地域が協働してまちづくりを行うために、大学生と地域の向き合い方、都合の良いお互いの距離間について考えることが重要になってくる。

２　学生と地域との向き合い方

（１）地域との距離間

では、一体どうすれば地域に大学生が入ってきても問題なく、一緒にまちづくり活動が行える距離間が生まれるのだろうか。それは地域側が十分に地域情報を伝え、何を求めているのか伝えるということと、大学生も一体何をしたいのかを明確に地域に伝えることである。そうした上で、お互いの意見をすり合わせ、合意形成を図ることが重要である。

しかしそうした合意形成を図るには、あまりにカテゴリーや価値観に違いがある。それが故に地域の人と大学生のコミュニケーションは必要不可欠である。会議という堅苦しい場面だけでなく、もっとフラットな会話ができる食事会のような場所を定期的に設け、親密度を上げる必要がある。その積み重ねを作ることで、大学生にとって、地域は身近な存在になるし、地域にとって、大学生は異質な存在からまちの一員と変化してくる。

また、行政やNPO、まちづくり協議会などがクッションとして機能することも大事である。大学生はまちに関わる当初、まちのことをほとんど知らないのが当たり前である。それはまちの雰囲気とかイベントとか、目に見えるもののことだけではなく、地域組織の仕組みやマナー、まちづくりの手順、歴史など多くのことについてだ。経験上、大学生はそのことを知らないことについてあまり気にしない傾向がある。目の前の目標に集中するあまり、本質的なところまで考えれないのである。しかし、その部分を知ることに着手しなくては、地域と向き合うこともできず、距離間を考えることもできない。行政やNPO、まちづくり協議会などが、大学生にレクチャーしつつ、足りない情報は地域から大学生が抽出してくる必要性がある。そして、そうした過程を踏む段階で地域との向き合い方や、距離間を自然と知っていくことになる。

（２）　地域を尊重する想い

大学生が地域でまちづくりを行うとき、自発的欲求が多いため、社会活動と地域活動との境目がなくなることが多い。社会活動は後で紹介するアースデイのように、自らが関心ある社会的課題について啓発もしくは奉仕することを目的とするため、自発的欲求を社会にどう表現するかを追求する。しかし地域活動は、自発的欲求だけを追求していてはすれ違いが生じる。人を知り、まちを知ることで初めて活動に参加できる。本来的に地域活動とは地域住民が行うべきことは前述しているが、大学生もそれを理解し、地域を尊重する想いをもって行動しなくてはならない。そのことを忘れて活動を進めると、例え成功のように見えても、それは地域活性には繋がらない。地域を置いてきぼりにすると結局その事業自体が崩壊することが多いし、また、地域が非協力的になり、活動の周知に苦労することになる。

地域側も大学生が何でもできる若者と思わないほうが良い。たまにまちづくりの勉強をしていることと、まちづくりのエキスパートとを勘違いしてしまう住民がいる。しかし大学生は、あくまで勉強途中の身なので、まちづくり事例や多少のスキルは持っていても、まちへの関わり方のプロではない。ただ、地域を尊重し、どうすれば一緒にまちづくりを行えるかは、常に一緒に考えてあげるべきである。

Ⅱ　事例紹介

１　西郡のまちづくり

（1）　西郡というまち

八尾市における西郡地域では、地域を尊重しつつ、大学生が地域との距離感を大事にする事例が見られる。

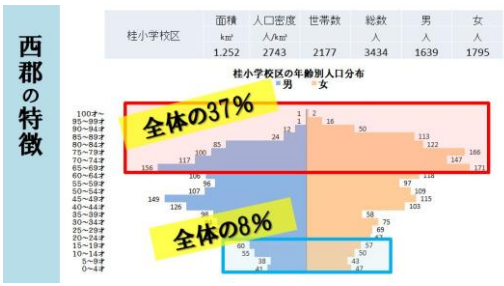
2014 年に八尾市と近畿大学建築学部と「まちづくり・建築研究推進連携協定」を締結し、それ以降地域内に大学生が出入りする姿が見られだした。特に旧市営住宅を大学生自らがリノベーションし、運営するようになった 2015 年からは、地域内イベントや日常に大学生が登場することは多くなった。地域の中でも、年々大学生の存在は大きくなり、地域に大学生がいても特に違和感を感じることが無くなってきた。

違和感が無くなってきて感じたことは、地域の人がどれほど大学生などのマンパワーを求めているかということだ。例えば、毎月１回一人暮らし高齢者向けの給食会を地域では開いている。趣旨としては栄養を考えたバランスのとれた美味しいごはんを食べてもらうことと、一人ではなく、一緒にごはんを食べることで交流する場を設けることにある。

写真１ 給食会の様子

この一回の催しの中で、スタッフも含め、約 40 人分の給食の準備と、それを調理室から食事場まで配膳しなくてはならない。それを今までは地域の給食ボランティアのみで行っていた。しかしボランティアも少しずつ高齢化とメンバーの固定化が進んでいたため、大量の配膳や重たいものを持つことに非常に苦労するようになってきた。もちろん、大学生がいなければそれがまったくできないわけではない。地域の若手が手伝いに来てくれることもあるし、大学生がいなければ、いないように工夫もするだろう。しかしながら、大学生が存在することによって、ボランティアの中にも気持ちに余裕が生まれ、世代間交流がしっかりと行われている。課題としては、今後対象者の一人暮らし高齢者の人たちに、大学生がどれだけ距離間を縮めていけるかということだ。

西郡というまちは、少子高齢化が著しく進んでいる。全体の 37%が 65 才以上であり、全体の８%が 15 才以下である。地域内の小学校に至っては、全校生徒数が 90 人を下回っている。



図表１ 西郡の人口分布[1]

また、このまちは最寄駅まで２km以上離れており、さらに約半分が市の土地であり、市営住宅や店舗付住宅、公園などが占めている。そのため、地域に新たな住人が入ってきづらい状況の一つの要因になっている。

図表２ 西郡の公共施設[2]

こうした現状を生み出した原因は様々であるが、大きな根源に部落差別があることは間違いない。そのことについて触れていくことは、この地域のまちづくりを行う上で必須な情報である。大学生においても部落差別については事前に西郡の歴史と共に学習する。しかしながら、決してこの問題は一括りでまとめられるものでもないし、差別を受けてきた個々人の人生においてとても繊細な問題でもある。また、差

[1] 八尾市統計データより抜粋
[2] 囲っている場所が公共施設

別問題は部落差別に限らず、多くの人権問題と繋がっている。高齢者の人権、障がい者の人権、女性の人権、子どもの人権などそれぞれの問題と複雑に絡まりあっている場合が多い。たった数日の講義や経験などで、すべてを理解し得ることは難しい。そこで大学生に求めるものは、包摂型社会の構築として、まちづくりにおいては、一人ひとりとしっかりと向き合ってもらうことである。

特に西郡については、こうした差別を背景に、先進的なまちづくりを行ってきた。そうしたまちだからこそ、まちづくりに関わる地域のメンバーは、地域社会の在り方について深く勉強されている方が多く、大学生にとってもプラスな面が多い魅力的な地域なのである。

例えば、西郡まちづくり協議会主催で毎年まちづくりシンポジウムが行われている。中身としては、地域内のまちづくりの報告とワークショップだ。これは、地域のひとや行政関係者、大学生など地域に関わる全ての人に声をかけて行われ、例年 100 名程度が集まる。こうしたフラットな関係の中で行う報告会やワークショップは大学生にとっても自分たちの意見が言いやすいとても有意義な場所になる。

写真 2　まちづくりシンポジウム

（2） 建築学部と社会学部

こうした社会的課題が顕著に表れ、まちづくりの経験が豊かなまちは大学生に、課題抽出からのまちづくりを実行する機会を多く与える。

建築学部は連携協定の枠組みの中で、地域に関わることになっているが、実際大学生個人にヒアリングをすると、西郡に関わる理由に、違う回答が返ってくる。“西郡の地域でどういったまちづくりが行われ、そこに自分の考えで新たな社会課題に対する行動を行えるかを試すことができる場だから関わることにしている。”これはゼミという環境の中で“様々なフィールド選択”という機会を通し、西郡地域を選んでいるから出てくる発言だ。こうした中で、実際にやりたいことがゼミ生としての１年間でできるのかが焦点になってくる。しかしながら、実際に１年間で満足することはできていないのが現状である。

なぜ満足できないのか。それは現実的に２章で述べたような経過を踏むことが極めて難しいからである。もちろん満足感や充実感だけを求めるならば、行政や地域の協議会が答えのある催しや実働としてのみタスクを与えることは可能である。しかしそれでは、大学生にとって何の糧にもならないし、地域のまちづくりの本質的な部分に触ることもできない。彼らにとって、地域情報を知り、それを活用しながら地域との距離間を考え、まちづくりを実行していくということは非常に大切なことなのである。皆、口を揃えていうことは、もっと時間があればお互いのことを知り得るのにいうことだ。しかしそうではない。確かに時間があれば、解決することも多いだろう。しかし最早時間が解決するという前提が大間違いなのである。大学生にとって時間は限られたものであることは、関わる前から分かっていたことだ。また地域にとって解決しなければならない問題は山のようにあるのだ。そうした中で、効率的なやり方を求めることは悪いことではない。大学生が地域の尊重の仕方を学び、まちづくりに関わることは早いに越したことはない。

建築学部は現在、旧市営住宅を大学生自らがリノベーションし、運営している。その存在や自分たちの存在を認知してもらうために、沢山の地域イベントに顔を出している。結果、約 3 年が経ち、地域から存在を認めてもらうことには成功した。

写真 3, 4　リノベーションした市営住宅

また、最近では自らが積極的に地域の現状を知るすべを模索している。もちろん大学生のみで行うのではなく、地域のまちづくり協議会やお店、自らがリノベーションした拠点などを有効活用し、多方面から地域情報を収集している。

時間的制約があるにも関わらず、こうした地域イベントへの参加と情報収集により、自分たちの立ち位置が見えてきている。地域の人からどのように思われているのか、どういったことを求められているのかを理解してきている。

写真 5　様々な地域イベントに参加

課題としては、この状況を学年が入れ替わっても継続できるかということだ。どうしても個人としての結びつきが大きいため、人が入れ替わるとまた一から関係性を築くことになってしまう。

そこで最近では、社会学部という別目線でのまちづくりに関わる学生たちにもまちづくりに参加してもらっている。彼らはまず、なぜ西郡に関わるのか、なぜ西郡のまちづくりに参加したいのかを追求してもらうことから始めて貰っている。彼らはゼミという枠組みの中からまちづくりに関わるのではなく、自主的にグループを作り、まちづくりに参加しようとしているからだ。彼らは自主グループ故に、1 回生からの参加が可能である。従って一番長い時間で言えば、大学 4 年生までの 4 年間地域に関わることができるようになる。すると地域情報の収集に、より時間をかけることができるようになる。そして、建築学部と連携することにより、より多くの情報を大学生同士で共有しながら進めることができるようになる。実際にこの取組みは今年度から始まったものなので、成果がでるのは今後になるだろう。

また社会学部の学生グループへのヒアリングから、“最終的な到着点より、実際に躓いて感じることのほうに興味が大きいこと”が分かった。つまり、結果より過程を大事にする傾向がある。まちづくりの難しさ、社会課題が如何に深いものなのかを実体験を通しながら実感している。

お互いの感じ方やプロセスは違うが、建築学部と社会学部の向かうべきところは一緒のように思える。また、彼らがお互いに刺激しあい、情報を共有することによって地域と向き合える時間は多くなるし、地域を尊重した試みを行うことは可能になる。

（3）　西郡はなはなマーケット

実際に建築学部と社会学部が協働で地域と向き合ったケースとして、西郡はなはなマーケットがある。西郡はなはなマーケットとは、地域の買い物支援を目的に西郡まちづくり協議会が地域内の方に声をかけ、毎月「ふれあい朝市」を行っているが、それを拡大し、地域外から出店や来場者を来てもらい、地域内だけで完結するのではなく、地域外の人にも西郡というまちを知ってもらうことを目的とするまちの啓発活動の一つである。

図表 3　西郡はなはなマーケットのロゴ

写真 6　マーケットの様子

今年度、初開催を行ったが、大学生の力を大いに借りたイベントとなった。当日の運営もそ

うだが、独自のワークショップが大変興味深いものだったので紹介したい。

建築学部は地域の小学校と連携し、小学生に食べたいものを旗に書いてもらい、当日の装飾兼作品を展示した。これはまちの小学生にマーケットを身近に感じてもらうことと、食べたいものを提供できるような出店を集め、来年のマーケットをより地域のニーズにあったものにすることを目的にしたプログラムだった。その過程で大学生は小学校の先生や小学生たちとコミュニケーションを取ることができた。

また、このプログラムのもう一つ意図は、小学生たちにまちに愛着を持ってもらうことだ。装飾というのは、ただ煌びやかにするのではなく、それ自身がイベントのイメージを大きく左右する。故に小学生たちが今後、より便利なまちに出て行ってしまったり、もしくは地域の中で暮らしているときに、自分たちが主役のイベントとして、思い出すことができるように工夫してもらった。

写真 7　マーケット当日、飾られた旗

社会学部は、買い物支援の観点から小学生を対象に駄菓子販売を通じた「売り子体験」を開催した。これも地域のお店やこども会などと調整し、新たな出会いを生み出した。調整中、地域のお店から子どもたちの現状や、実際にお店で苦労していることなどを聞きながら、当日どうすれば成功するかを丁寧に教わっていた。

当日は、子どもたちに付き添いながら一緒に地域の人たちへ販売に回った。こうして地域の世代間交流の手助けとして、大学生が橋渡しをしたのである。

写真 8　売り子体験のブース

プログラムはそれぞれ別だが、自分たちが主役でなく、地域の子どもたちが主役になる手法を使った、地域を尊重するプログラムだった。また、敢えて当日はわき役となりつつ、運営ボランティアを行い、地域のまちづくりイベントとして成功を収めたことは、とてもバランスの取れた距離感でまちと関われたのではないだろうか。そして何より、一から自分たちで段取りを行ったことが学生たちにもプラスとなった。彼らはこれをきっかけに地域に溶け込む手段を学んでいく。また、地域も大学生の存在を意識していく。今回の取り組みは、ただのお手伝いではなく、大学生自身がまちづくりを地域と共に行うための重要なきっかけとなった。

こうした一から自分たちで企画立案したプログラムを現実にまちづくりに落とし込んでいくことこそが、彼らにとっての重要な経験となる。

では一体こうしたプログラム手法をどこで培えば良いのだろうか。

２　ハッピーアースデイ大阪

（１）　学生主体の活動

プログラム手法を身に着けるのに、最適なのが社会活動への参加である。社会活動では、自発的欲求を追求するため、比較的行動に移すまでがスムーズに行われる。しかしながら、その過程において、デザイン力や企画力など社会に対して発信するためのスキルは身に着けていかなければならない。

今回は西郡のまちづくりに参加する社会学部の学生たちが参加する、ハッピーアースデイ大阪を例にとりたい。

写真 9　アースデイ HP のトップ画像

ハッピーアースデイ大阪とは 2011 年から毎年3月に八尾市にある久宝寺緑地で行われる環境イベントである。

アースデイは「地球の日」として、その日は地球のことを考えようとする世界規模のムーブメントであり、発祥はアメリカである。現在では世界中に広がり、世界 192 ヵ国、5 万を超える取組みが各地で行われている。

ハッピーアースデイ大阪もその取り組みの一つであるが、基本的に各地のアースデイは独立型の運営と手法を取っており、中央集権型の取り組みではない。ハッピーアースデイ大阪も独自の方向性を持って取り組んでいる。設立当時から変わらぬ方向性として、学生主体で活動を行うという理念がある。これは、社会に出る前という、自分たちの主義主張や社会的課題に対する想いが深い時期だからこそ、その想い(自発的欲求)を社会で具現化する場所が必要だと考えているからだ。もちろん運営については社会人もフォローをするが、運営・企画・広報含め、すべて学生たちが失敗を重ねながら進めていく。現在では毎年 40 個の企画、100 店舗の出店が集まり、約 1 万 5 千人の来客が訪れるイベントになっている。

写真 9　アースデイでの様々な企画

なぜこうした活動が可能なのか。それは、フォローする社会人が様々なネットワークを持っていることや、デザイン会社、ウェブ会社、社会的企業、NPO、公務員など多岐にわたるアドバイザーがいることである。また、こうした繋がりが毎年増えていくので、大学生たちのニーズにマッチングした人に出会う確率も増えていくし、大学を卒業した人たちとも縁は切れず繋がりはあるので、引継ぎなどのデータの蓄積なども比較的スムーズである。

これは現代の SNS などを活用できるネット社会だからこそ、実現しているシステムだろう。

こうした社会活動に参加するのではなく、企画していき、具現化に向けて実行していく力は、間違いなく大学生にとってプラスとなる。

また、自らが考えた企画が社会で多くの人に受け入れられるプロセスを経験することは、大学生の時期には本来ならばなかなか経験のできないことである。やりがいと達成感、そしてそのスキルを身につける場として、ハッピーアースデイ大阪は毎年継続して、学生主体で行われている。

もちろんこうした取組みは、大学生自体にメリットもあるが、イベント自体にもメリットがある。それは大学生自身が 4 年間経てば、卒業していくことである。つまり毎年新しい学生が入ってくるし、リーダー的存在も変化していく。これはつまり、時代と共に大学生の関心や個々人の関心も変わっていくように、イベントも時代と共に一緒に変わっていくことと、マンネリ化を防ぐ要因となっている。

写真 10　アースデイ大阪 2017 メンバー

（2） 社会活動からのまちづくり

こうした社会活動を通して学んだ経験はまちづくりにも活かせる。

２章２節で紹介したように、自発的欲求を社会にどう表現するかという行為を追求するだけでは、まちづくりには適さない。しかし、こうした社会活動を行っているからこそ、自己を表現する能力は向上する。こうした能力がまちづくりでのプログラム手法に結びついていく。

どうしてこうした能力をまちづくりで発揮できるかは、前述したとおりだ。これは地域住民と向き合うときに大学生に求められる能力として、大変重要なものである。

本来ならばまちづくりを行いながら、そういったことを学べればよいのだが、実際にそこまでのことをまちづくりのフィールドで養うことは時間的にも難しい。アースデイのような、より具現化することに長けたひとが多い場所でこそ磨かれるのである。それをまちづくりのフィールドに落とし込んでもらうことで、本来のまちづくりの関わり方も同時に学べるのである。

Ⅲ　これからの学生とのまちづくり

今の大学生にとって、まちづくりのフィールドを選ぶということは社会と関わる一つの手段なのである。彼らは一人ひとりが個性を持ち、一人ひとりが主義主張を持って地域活動に参加してくる。これをすべて丁寧にひも解いて、希望を叶えてあげることは難しい。だが地域に

とって彼らが関わることで、何らかのメリットがあるとするならば、少なからず彼らの声に耳を傾ける努力も、地域には必要なのではないだろうか。そして、大学生は自分というアイデンティティを大切にしながら、地域を尊重し、真剣に向き合う覚悟が必要なのではないのだろうか。楽しくまちづくりをするということは大切なことである。だが、それは真剣に行わずに軽く参加することでは決してない。大学の４年間を決して無駄にしないでほしい。真剣にまちづくりに関わるからこそ、楽しく、そして記憶に残るまちづくりができるのである。社会に出ても、また関わったまちに戻ってきたくなるような、そんな経験を積んでほしいと切に願う。

〔参考文献〕

『部落解放研究』、解放出版社、No.207 pp36-59

西郡はなはなマーケット

http://hanahana.strikingly.com/

ハッピーアースデイ大阪

http://www.happy-earthday-osaka.jp/

（2018 年 1 月 10 日脱稿）